TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の Funky Corner

文●波多 利朗　text by Hata Toshiro
（URL）http://www.sky-sea.co.jp/~catty/
（E-Mail）catty@mxp.mesh.ne.jp

ザ・Poqet兄弟

ロシアカメラの話
（もしくは恒例前フリの脱線コラム）

今回の前フリコラムは、カメラについてである。カメラマニア御用達のメーカと言えば、真っ先にLeicaを思い浮かべる人も多いであろう。筆者はディープなマニアでは無く、おまけにビンボー（清貧ですよ！　清貧！）であるため、とても本場モンのLeicaなぞ持てるワケが無い。しかし、これがロシアカメラとなると、話しは別だ。

1950～1970年にかけてロシア（というよりは旧ソ連）で製造されたカメラには、本家Leicaのコピー製品や独特なデザイン・仕様を持ったものが多かった。これらのカメラは、長い間鉄のカーテンの向こう側に隠されていたのだが、最近になって日本にも流入し始め、にわかなブームになりつつあるようだ。

ロシアカメラは価格が手頃で、Leicaコピー機の他にもいろいろと怪しい製品が多い。かくして、もともと怪しいモノが大好きな筆者の手元には、あっという間に10数台のロシアカメラが集まってしまったという次第である。

今回は、そんな怪しいカメラの中からこの1台をご紹介しよう。旧ソ連のカメラメーカであるKMZ社が製造したKRISTAL（クリスタル）である（001）。この一眼レフ・カメラは、1961年～1962年の間に総計6万5,433台が製造されたそうである。1モデルあたりの製造台数が十数万台というのがザラである

001 KMZ社製一眼レフ、KRISTALの外観写真
旧ソ連KMZ社が1961年に製造した一眼レフカメラ「KRISTAL（クリスタル）の勇姿。レトロでごっつい面構えだ

002 KMZ社製一眼レフ、KRISTALのアップ
「KRISTAL（クリスタル）」のペンタプリズム部分のアップ。結晶焼きつけ塗装が迫力満点！

003 Poqet PC Classicの外観写真
Poqet Computer Corporationが1989年に発売したパームトップパソコン、Poqet PCの外観。パームトップ界のシーラカンスだ

004 Fujitsu Poqet PC Plusの外観写真
Poqet PC Classicの後継機種として1993年頃に発売となったFujitsu Poqet PC Plusの外観。でかくてごっつい

ロシアカメラの中にあって、製造台数が桁違いに少ないモデルであると言えよう。このカメラでまず圧倒させられるのが、そのデザインである。ペンタプリズム部分のレトロな造形などは、まるでテリー・ギリアム監督の映画「未来世紀ブラジル」にでも出てきそうな外観だ（002）。

外装の金属部分も、プロカメラマンが使う三脚を思わせる結晶焼付け塗装で、まるで民生品カメラとは思えないくらいゴツい。カメラ本体のデザインも特徴的であるが、クリスタルはその仕様面でも現在の製品と異なるところが多い。たとえば、シャッターを切るとミラーが上がったまま戻らないので、ファインダーがブラックアウトした状態となる。これは、ミラーのリターンがフィルムの巻き上げ操作時に行われるためだ。さらに、ピントを合わせるためには、絞りを全開にして行わないと、ファインダーが暗くて良く見えない。従って、撮影時には一旦絞りを全開にしてピントを合わせた後、適正絞りを設定することになる。書き忘れたが、フルマニュアル・カメラであることは言うまでもない。

一眼レフのごく初期の製品ということもあり、クリスタルはあたかもシーラカンス的存在とも言える。こうしたカメラに接してみると、一眼レフ・カメラがどのように進歩してきたかがわかり、興味深い。これと同じような感じを受けるのが、今回ご紹介するパームトップパソコン、Poqet PC Classicであろう。このマシンも色々な面で、その後登場するパームトップ機の原器ともいえる、シーラカンス的な仕様となっている。このPoqet PC Classicと、その後継機種であるPoqet PC Plusの「ザ・Poqet兄弟」を見ると、パームトップ機の進化を感じ取ることができるのである。

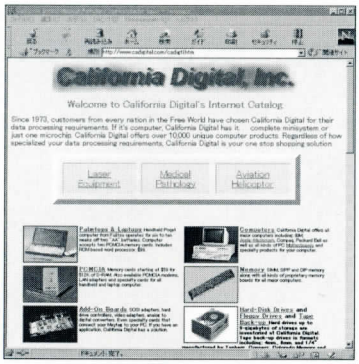
異母兄弟

さて、本題に入ることにしよう。

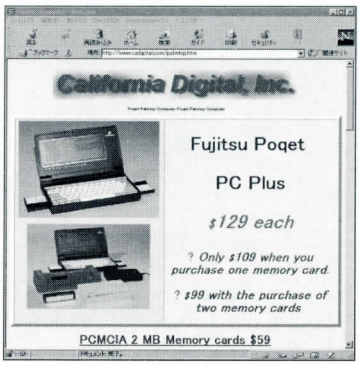
Poqet Computer Corporationが1989年に発売したPoqet PCという機種は古参のパームトップ・ユーザの方には知名度が高い（003）。1989年といえば、前回、前々回にご紹介したATARI Portfolioが発売された年である。Portfolioが発売されたのと同じ年に、謎ぱ～機（謎のパームトップ機）界の原器とも言えるマシンが登場していたのは興味深い。このPoqet PCはユーザからの支持も多かったようで、正確な年はちょっとあやふやだが1993年頃にはPoqet PCの後継機種であるPoqet PC Plusが、今度はFujitsu Personal System社から発売になったのである（004）。

さて、この2台のマシン、両方ともPoqetの名を冠してはいるものの、その外観やスペックはかなり異なっている。人間に例えれば、さしずめ異母兄弟と

005 ザ・Poqet兄弟の写真
スリムな兄とデブの弟とも言えるザ・Poqet兄弟。異母兄弟としか言いようがないな……



006 California Digital社のホームページのトップ
インターネット上の怪しい通販ショップ、California Digital社のホームページ（http://www.cadigital.com/）。Poqet兄弟は、このショップから購入した



007 Poqet PC Plusが掲載されたCalifornia Digital社のホームページ
10月末現在、$129で販売されているPoqet PC Plusが掲載されたCalifornia Digital社のホームページ

でも言おうか。スリムな兄とデブの弟とでも言えそうなコンビなのだ（005）。

California Digital について

Poqet兄弟のことを書く際に避けて通れないのが、アメリカはカリフォルニアにショップを持つ「California Digital」という通販会社である。この会社、謎ぱ～機マニア諸氏にとっては結構名が通ったショップであり、筆者も4年くらい前から数回利用している。

さてこのお店、何が特徴かと言うと、取り扱い商品に怪しいものが多い、と言うか「怪しいものしか扱っていない」のだ。まるでネット上に開店したジャンク屋とでもいった感じだ。暇でギークな廃人の方は、是非チェックしてみて頂きたい。因みに同社のホームページはhttp://www.cadigital.com/cadigtl.htmとなっている（006）。

このCalifornia Digital社で4～5年前に取り扱っていた商品の一つに、異様に安いパームトップパソコンがあった。これが今回ご紹介するPoqet PC Classicである。どうやら、どこかの倉庫にお蔵入りしていたものを大量に買い付けてきたようで、ホームページ上で新品を1台$189で販売していた。その時の宣伝文句に「発売当時は$1,450したパームトップ機である」なんて書かれていたため、余計目を引いたものだ。この怒涛のディスカウント商品は当時廃人連中の掲示板でも話題となり、この初代Poqet PCは比較的短時間で在庫切れとなる。

その後1999年初頭にナント！　同社のホームページ上にてPoqet PCの後継機種であるPoqet PC Plusが発売されたのである。後継機種発売の情報がネット上の掲示板に流れた時、筆者はコーフンしたものだ。当時ガシガシにいじくり回していたPoqet PCの跡継ぎということもあり、とても魅力を感じたのである。しかし、California Digital社のホームページを見るとPoqet PC Plusのところには従来のPoqet PC Classicの写真が代用されており、この後継機種が、いったいどのような形状をしているのかが全く不明なのだ。

普通ならば、商品の外観も見ないで発注するなんてことは絶対にしないのであるが、$99（但しセコハンだけどね）という冗談みたいな値付けに負け、勢いで発注してしまった。発注時、筆者は当然のことながら、Poqet PCに良く似た形状の、ちょっと古臭くておシャレで個性的なマシンが届くだろうと期待していた。しかし！　届いた製品は、初代Poqet PCとは似ても似つかぬ無骨なデザインであったのだ。いやはや、これには参ったね！　デザイン面では見事に裏切られましたよ……。

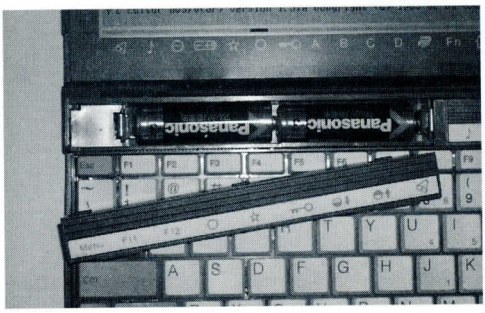
ちなみに、現在ではWEB上にちゃんとPoqet PC Plus本体写真が掲載されている。どうやら発売当初は、商品画像が間に合わなかったようである。その後Poqet PC Plusの価格は若干値上げされ、現在は同じくセコハン品を$129で販売している。値上げされたとはいえ、まだまだ激安と言えよう（007）。

Poqet PC Classic (PQ0164) と Poqet PC Plus (PQ-0201) の概要

1. Poqet PC Classic (PQ0164) の概要

Poqet兄弟のアニキである初代Poqet PCであるが、正式名称をPoqet PC Classic Model PQ0164という。さすがにこれでは長ったらしいので、ここではただ

008 Poqet PC Classicのキーボードのアップ
Poqet PC ClassicのXT互換キーボード。キーピッチは17mm程度確保されており、タッチタイピングは容易である。明確なクリック感もある



009 Poqet PC Classicのバッテリー
キーボード上部に位置するClassicのバッテリー。単三乾電池2本を使用している。なお、バックアップ用のサブバッテリーは搭載されていない

単にClassicと呼ぶことにする。また、その後継機種の正式名称は、Poqet PC Plus Model PQ-0201というが、ここでは単にPlusと呼ぶことにしよう。

1989年に発売されたClassicは、デザイン的にはかなり個性的な製品であった。本体には黒地に真紅のストライプが入った、現代のパームトップ機にはまず見られないカラーリングだ。ケース表面の塗装もソフトに仕上がっており、作りは一見良さそうだな、なーんて思ってよく見ると、本体からLCDパネルへの配線がフラットケーブルむき出しになっていたりと、作りの粗さが目に付いちゃったりする。

Classicの外観は、その後登場する富士通オアシスポケットを髣髴とさせる。それもそのはず、後日このPoqet Computer社はFujitsu Personal System Inc.に吸収されてしまい、同社のパームトップ技術はそのままオアポケに継承されたからなのである。このClassicというマシンは、タッチタイプ可能なキーボード、CGA互換の液晶、PCMCIAカードの採用など、その後の謎ぽ～機の基本的な要素を内蔵した原器的存在のマシンであった。

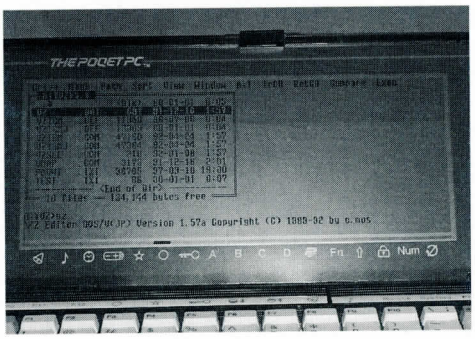
ClassicのCPUには、IBM The PCやIBM PC/XTと同じ80C88（7MHz）を使用している。8086命令しか実行できない8088 CPUを搭載しているということは、日本語FEPを使用する上で後々かなりの障害となってくるのだが、そのことについては後述しよう。

内蔵メモリは、システムRAMとして512Kバイト、ROMとして640Kバイトを搭載しており、ROMにはMS-DOS Ver 3.30と各種アプリケーションプログラムが格納されている。MS-DOSのバージョンからも、この製品の歴史を感じることができる。

Classicのキーボードは77キーのQWERTY配列で、17mm程度のキーピッチを備えている（008）。明確なキークリック感があるため、タッチタイピングは容易なほうだ。XT互換マシンということで、キーボードは「Ctrl」キーが「A」キーの隣りに配置される、いわゆるXTキーボードを採用している。

メインバッテリーはF1～F8キーの上部に格納されており、単三乾電池2本を使用する（009）。正確なバッテリーの持続時間は不明である。当時の資料には100時間程度の使用が可能だと書かれているが、さすがにこれは大袈裟な表現であると言えよう。サブバッテリーは搭載していないため、電池交換時には内蔵のキャパシタでメモリの内容を保持する。また、ClassicにはACアダプタといったものが用意されていない。

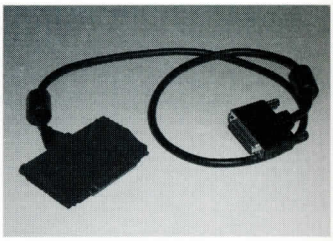
ClassicのLCD画面は、かなり特殊だ。すなわち、起動時にはMDA（モノクロ・ディスプレイ・アダプタ）互換モードとなっており、ファンクションキー操作により、その後の謎ぽ～機にとって一般的な仕様であるCGA互換ディスプレイに切り替わる。Classicの場合、起動時はMDA固定となっているの



010 Poqet PC Classicの液晶画面
Poqet PC Classicの液晶画面。画面サイズは大きいが、液晶のコントラストが低く全面パネルの反射が多いため、視認性は悪い

011 Poqet PC ClassicのPCMCIAカードスロット
現在のパームトップ機ではお目にかからないトレー式のPCMCIAカードスロット。ClassicではType-Iのみ使用できる

012 Poqet PC Classicの拡張I/Oポート端子
Poqet PC Classicの拡張I/Oポート端子。コネクタ形状は独自仕様となっている。XTバスそのものというウワサもある



013 Poqet Paralle Port Cableの外観写真
Poqet PC Classicにパラレルポートを増設する時に使う専用ケーブル、Poqet Parallel Port Cableの外観

で、日本語化する場合にはビデオモードを手動で切り替えなくてはならない。この切り替えは「Poqet」+「F3」キーで行う。LCDの品質は、製造時期が古いこともあり非常に貧弱だ。コントラストが弱くバックライトも装備されてないため、暗いところではかなり読みにくい。しかし、有効画面エリアは173mm×66mmと、大きさ的には充分である（010）。

ATARI Portfolioでは、カードスロットにPCMCIAではなく専用仕様のものが採用されていたが、ClassicではPCMCIAが取り入れられ、大きな特徴となっている。但し、このマシンで採用されているPCカードスロットは、通常のパームトップパソコンに採用されているスロット式ではなく、トレイ式だ（011）。カードトレイは左右両側に2基設けられており、トレイを引き出すと内部基板がむき出しになる。確か、富士通のオアポケもトレー式を採用していて、同じように基板がむき出しになったような気がするな。ClassicのスロットではType-IのPCMCIAカードしか使用することができず、フラッシュメモリカードやモデムカードは使えない。実際に使用できるカードは、容量が2Mバイトまでの SRAMカードのみと考えてよかろう。

拡張I/Oポートのコネクタ形状も特殊である（012）。本体背面には専用の拡張ポート用コネクタが設けられており、ゴムのカバーでふさがれている。モデムやプリンタを接続する場合には、ここに専用のケーブルを接続する。デスクトップPCとシリアルインターフェースで接続したり、モデムを接続してパソコン通信を行う場合には、ここにPoqet Serial/Modem Cableという別売りケーブルを接続する。このケーブルは、本体背面にある専用のコネクタを、D-Sub 25ピンメスのRS-232C標準コネクタに変換する機能を持っている。

また、プリンタを接続する場合には同じく専用のプリンタケーブル（Poqet Parallel Port Cable：MODEL No.PQ-0572）を用いる。このケーブルを使用すれば、D-Sub 25ピンメスのパラレルポートを得ることができる（013）。ここでちょっとややこしいのは、シリアルケーブルもパラレルケーブルも、両方とも同じD-Sub 25ピンメスコネクタとなっている点だ。ケーブルの外観も全く同一なので、製品底面のシールに記載された型番を見ない限り、区別が付かない。

なお、オプションのケーブル類には、これ以外にも外付けフロッピーディスクケーブルも用意されていたようであるが、今となっては入手することが非常に困難な「お宝」となってしまった。詳細な仕様書がないため確認してはいないが、ウワサによるとこの拡張ポートの信号線は、XTバスそのものだということである。

2. Poqet PC Plus（PQ-0201）の概要

Poqet Computer Corporationはその後Fujitsu Personal System社に吸収される。Classicの発売から約4年後、後継機種として登場した製品が、Plusである。California Digital社のホームページ上では、Fujitsu Poqet PC Plusとして掲載されている。

Poqet PC Plus本体の大きさは、228×130×38mm（突起部分を含まず）で、かなり大きくかつ厚い。Classicはポケットに入れることができる大きさであったが、Plusではとても無理だ。本体外観を見ただけでは、これがあのClassicの後継モデルだとは、どうしても思えない。しかし、キーボードは旧モデルを踏襲したものとなっており、面影が残っている。なお、キーを押した感じはClassicそのものだ（014）。

PlusのCPUにはV30が採用されている。Classicが

014 Plusのキーボードのアップ
Poqet PC Plusのキーボードのアップ。基本的にはClassicのそれとほぼ同等のものが搭載され、旧モデルの面影が色濃く残っている

015 PlusのPCMCIAコネクタのアップ
Plusでは、Classicと同様トレー式のPCMCIAスロットを搭載しているが、PlusではType-IIのカードが使用できる

016 Plusのバッテリー
本体下部に装着されるPlusのバッテリー。Classicと異なり、充電式の専用電池となった

8088 CPUを使用していたために、動作ソフト、特に日本語FEP関連で色々と動作制限が生じていたのと比較すると、格段に使いやすくなっている。しかもCPUクロックは16/8/4/2MHzと4段階に変更可能で、DOSアプリの動作も充分軽快である。

Plusの最大の特徴は、PCMCIA Type-IIカードも使用可能となったことであろう。しかし、カードスロットは、Classicと同様にトレー式を踏襲している。ここも、旧モデルの面影が残っている部分だ。カードトレーは、本体右側がAドライブ、左側がBドライブとなっている。モデムカードのように、いわゆる「ブタの尻尾」が付くカード用に、各トレーの側面部分は開閉可能な構造になっており、設計は細やかだ(015)。

Plusは、メインバッテリーとして本体下部に専用のNi-Cd充電式のバッテリーを搭載している(016)。Classicではバックアップ用のバッテリは内蔵されていなかったが、Plusでは本体下部にNi-Cdバッテリーが格納されており、電池交換時にデータが消失してしまう危険は少なくなった。因みに筆者のマシンでは、経年変化によりバックアップバッテリーが粉を吹いてしまっており、全く使い物にならなかった。まあ、セコハン商品であるからして致し方ないが、何も粉まで吹くこたぁないと思うのだが……。

Classicと比較して、一番進歩したところが液晶である。アクテブエリア172mm×66mmの液晶画面は非常に見やすく、Classicのように表示速度が遅いということも無い。さらに、この手の謎ぱ〜機としては珍しくバックライトまで付いていて、まさに至れり尽くせりだ(017)。Classicの液晶は、視認性が悪い上に液晶パネル前面がテカテカに光っており、液晶の画面撮影の際にはカメラマン泣かせであったことを思うと、格段の進歩であると言えよう。

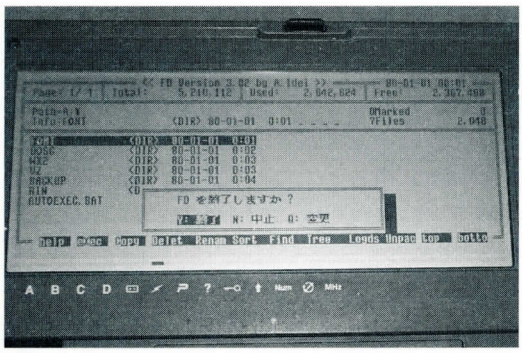
また、Classicでは起動時のビデオモードがMDA固定で、日本語化する場合にテクニックを要したが、Plusではシステムセットアップメニューで、起動時のディスプレイモードとしてMGAとCGAどちらかを選択できるようになっており、このあたりも扱い易くなっている。

3. 異母兄弟マシンの仕様比較

以下に、Poqet PC PlusとPoqet PC Classicの仕様比較表を示す。

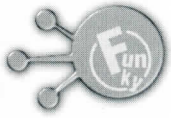
モデル名称	Poqet PC Plus	Poqet PC Classic
型番	PQ-0201	PQ0164
メーカ	Fujitsu Personal System Inc.	Poqet Computer Corp.
CPU	V30 (16/8/4/2MHz)	80C88 (7MHz)
メモリ容量	MaskROM 1Mバイト、 FlashROM 1Mバイト	ROM 640Kバイト
	RAM 2Mバイト	RAM 512Kバイト
液晶	白黒液晶640×200dot CGAとMDAとを選択可能	白黒液晶640×200dot CGAとMDAとを選択可能
アクティブエリア	173×66mm	173×66mm
キーボード	QWERTY 77キー	QWERTY 77キー
I/Oポート	Serial A (RS-232C) Serial B (TTL) 共に独自仕様コネクタ	本体背面の専用拡張スロットに専用ケーブを接続して使用する シリアル/パラレル使用可能
本体重量	790g (バッテリーを含む)	450g (乾電池を含む)
メインバッテリー	専用Ni-Cd充電池1個	単三乾電池2本
持続時間	2〜8時間	約100時間 (ホントかよ?)
サブバッテリー	Ni-Cd充電池を内蔵	無し
PCカードスロット	PCMCIA Type-II 2基実装 2MバイトまでのSRAM CARD 2MバイトまでのSRAM CARD	PCMCIA Type-I 2基実装 20MバイトまでのSunDisk Flash Card
大きさ (mm))	228 (W) ×130 (D) ×38 (H)	223 (W) ×109 (D) ×25.4 (H)
内蔵OS	MS-DOS Ver 5.0 ROM版	MS-DOS Ver 3.30 ROM版
付属品	ACアダプタ バッテリーチャージャー	——
オプション	不明	シリアル・モデム・ケーブル パラレル・プリンタ・ケーブル 外付けフロッピーディスクドライブ

てゆーか、モバイル端末って それ自体のボディーが、



017 Plusの液晶画面
Plusの液晶画面。一番進歩した点が、この液晶パネルである。謎ぱ～機の中では非常に珍しくバックライトまで付いている

018 Classic上で動作するFEP「鳳」
Classic上でVzを起動しFEP「鳳」で日本語入力を行なっているところ。超多段シフト方式という特徴的な変換方法だ



日本語環境について

さて、謎ぱ～機を見ればその画面に日本語を表示させたくなるのが人情というものだ。特にちょっとやそっとでは日本語化できないような、筋金入りの謎ぱ～であれば、余計燃え上がろうというものだ(これってやっぱ変かなぁ？)。

幸いClassicもPlusも、比較的容易に日本語化することが可能である。しかしマシンアーキテクチャーが古すぎるClassicの方が、日本語化に要する手間は格段に多い(もっとも、苦労が多い分だけ面白いと言えるが)。以下、両マシンの日本語化について簡単に述べる。

1. Poqet PC Classicの場合

1-1. Classicでの日本語表示

Classicで日本語表示を行うために必要なファイルを、下記に示す。

FONTX形式のフォントファイル

FONTMAN.EXE	フォントマネージャ
FONTMAN.INI	フォントマネージャの環境設定ファイル
YADC.EXE	CGA用ディスプレイ　マネージャ
YADC.INI	CGA用ディスプレイ マネージャの環境設定ファイル
PANSI.SYS	ANSIドライバ互換のドライバ
DBCSDUMY.SYS	DBCSに対応させるように見せかけるドライバ
MNFER.SYS	FEPを使う際に必要となるドライバ(後述)

通常の謎ぱ～機と同様、Classicでも上記ファイルを用いたDOS/C化が可能である。Classic特有の処理としては、dbcsdumy.sysを組み込むことくらいであろう。このdbcsdumy.sysとは、MS-DOS Ver 3.XのようにDBCSに対応していないDOSを、DBCSに対応しているように見せかけるためのドライバソフトであり、MS-DOS Ver 4.X以降でしか動作しないDOS/V用ディスプレイドライバ及びその互換ドライバを、MS-DOS Ver 3.X上で動かす際に使用するためのものだ。さらにFEPを組み込む場合には、MNFER.SYSも必要となる。

一般的な謎ぱ～機であれば、上記ドライバ類を組み込んでリセットボタンをパキっと押せば日本語が表示されるのであるが、Classicの場合はそう簡単にはいかない。というのも、上述したように、Classicでは起動時のビデオモードがMDA固定となっているからである。従って、「Ctrl」+「Alt」+「Del」キーでリセットをかけた後、「Poqet」+「F4」キーを押して、マニュアルで画面モードをCGAに切り替えるという操作が必要となる。タイミングとしては、リセットをかけてからすぐに続けて「Poqet」+「F4」キーを押せばよい。怪しい裏技といえるであろう。

1-2. Classicで動作する日本語FEP

日本語表示は比較的簡単なのだが、日本語FEPとなると、そう簡単にはいかない。この場合ネックとなるのは、Classicが8088 CPUを使用しているということと、キーボードがXT互換であるということだ。

現状、動作が確認されている日本語FEPは、以下の通りである。

・鳳（018）

超多段シフト方式という特徴的な変換方式を採用したFEPである。メモリ常駐量も少なく歴史のあるFEPであるが、今となってはご存知の方も少なくなってしまった。このFEPは、8086命令しか実行できない旧世代のマシンでも問題無く動作させることが可能な、貴重なものなのである。

Classicで「鳳」等の日本語FEPを使用する場合には、ClassicのキーボードがPC/AT互換では無くPC/XT互換であるために、8086版mnfer.sysというドライバが必要となる。このmnfer.sysは、もともとOmronが発売していた携帯端末Masiif上で、内蔵されているVJE Σ以外のFEPを動作させるため、べんぜん氏が作成したものだ。べんぜん氏のmnfer.sysはMassifを対象としているため、80186命令を使っており、Classic上では動作しない。従って、Poqet PCでは、8086命令のみを使用した、Star Boze氏作成の8086版mnfer.sysを使用する必要がある。

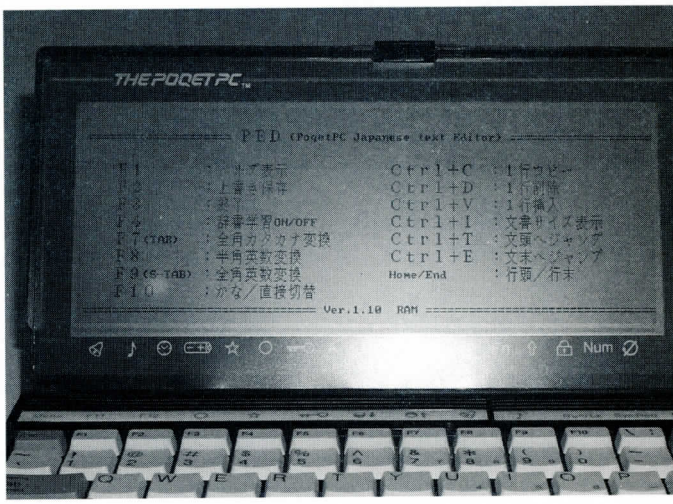
・EGBridge Ver 3.11

EGBridge Ver 3.11は、エルゴソフト社のワープロソフト「アシストワード」に付いてくる日本語FEPである。もともとこのFEPは8086命令のみしか使っておらず、Classicのような旧世代の製品でも動作させることが可能なのだが、FEPの起動キーがデフォルト設定で「Shift」+「変換」キーに割り振られており、「変換」キーが無いClassicでは、起動させることができないという致命傷があったのだ。この問題を解消するためのドライバソフトが、Madame Fatale氏制作のremapegp.comである。EGBridgeを組み込んだ後で、このドライバをメモリに常駐させることで、FEPの起動を「Alt」+「=」キーに割り振ることが可能となる。ただし、V-TEXTに対応していないため、25行モードで使用しないと作業行が表示できないという制限事項がある。また、使用時にはPoqet PCのパワーマネジメントをオフにしなくてはならない。また、8086版mnfer.sysの組み込みも必要となる。

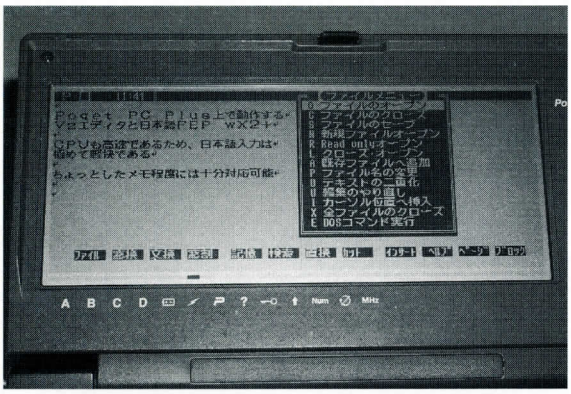
1-3. PEDを使用した日本語入力

以上述べたように、Classic上でDOS/C化を行い、FEPを組み込んで日本語環境を構築するのは、かなりやっかいである。こんな面倒臭いことはやってられねえとおっしゃる方も多いであろう。そんなアナタには、Poqet PC専用の簡易的な日本語エディタである「PED」がオススメである。PEDは、筆者の知人であり世捨て人でもある、柴隠上人 稀瑠冥闇守（Kerberos）氏制作のPsion3a用日本語エディタ「JEdit」を、remapegpの作者でありロシアカメラの収集家でもある奇人Madame Fatale氏が移植して作成したものだ。PEDシリーズには、Poqet PC専用版の他に、以前本コーナーにてご紹介したATARI Portfolio専用版とCGAマシン汎用版の、計3種類が存在する。今回はPoqet PC専用版PEDを使用する。

このPEDの便利なところは、fontmanやyadcを使用した日本語環境（DOS/C環境）が一切不要であるところだ。英語環境のままPEDを起動させれば、日本語が即使えるようになる。しかし、日本語が使用できるのはPEDの中のみで、PED以外のアプリケーションソフトでは日本語が使えない。PEDを使えば面倒な作業は一切不要で、最も簡単に日本語のテキストを作成することが可能となる（019）。



019 Classic上で動作する簡易日本語エディタPED
Classic上で動作する簡易日本語エディタPEDの画面。DOS/C化が不要なので、最も簡単に日本語が扱える方法だ



020 Plus上で動作するVzとWX2+
Poqet PC Plus上で動作するVzエディタとWX2+。CPUも高速であるため、日本語入力は極めて快適である

2. Poqet PC Plusの場合

2-1. Plusでの日本語表示

Plusで日本語表示を行うために必要なファイルを、下記に示す。

FONTX形式のフォントファイル

FONTMAN.EXE	フォントマネージャ
FONTMAN.INI	フォントマネージャ用環境設定ファイル
YADC.EXE	CGA用ディスプレイマネージャ
YADC.INI	CGA用ディスプレイマネージャ用環境設定ファイル
ANSI.SYS	ANSIドライバ
KKCFUNC.SYS	カナ漢字変換ドライバ
MNFER.SYS	FEPを使う際に必要となるドライバ

Plusは、起動時にCGAモードに設定することができるため、Classicのように手動でビデオモードを切り替えるような手間は不要だ。搭載されているOSもMS-DOS Ver 5.0なので、DBCSDUMY.SYSのようなドライバを組み込む必要もない。ただし、Classicの場合もそうであったがPlusもキーボードにPC/XT互換のものを採用しているため、mnfer.sysを導入する必要がある。これは意外と見落としがちで、筆者も最初mnfer.sysの導入を忘れてしまい、日本語化した後でハングアップを起こしてしまった。

2-2. Plusで動作する日本語FEP

CPUにV30を搭載したPlusでは、8086命令しか実行できないClassicと比べると日本語FEPの導入が極めて容易である。筆者は謎ぱ〜機のFEPとして良く用いられているWX2+を導入している（020）。

おわりに

ClassicとPlusを比較すると、当然のことだがPlusの方が格段に使い勝手が良い。これはCPUが高速で液晶もキレイであるから、ある面当たり前といえば当たり前だ。ただし、いくつか不満も残る。Plusではメインバッテリーが充電式になっており、汎用の単三アルカリ乾電池が使えない。外出先でのバッテリー切れの際は、専用の充電器を用いてバッテリーを充電しなくてはならない。しかし、何よりも不満なのは、その大きさであろう。Classicが非常にスリムでおシャレな外観であったのに対し、Plusは重くて無骨で、垢抜けないデザインである。とても同じPoqetシリーズとは思えない。

そんなわけで、筆者は高性能のPlusよりもClassicの方に好感を持ってしまうのである。Classicのような非力なマシンでも、その気になればインターネットに接続してメールのやり取りを行うことも可能だ。手間はかかるが面白いという感じで、これはいわゆる「できの悪い子ほどカワイイ」というやつなのであろう。

若干Plusに対する評価が厳しくなってしまったが、これはあくまでデザインと大きさに因るところが大きく、性能面ではPlusはClassicの数段上を行く。Plusの現状での販売価格（$129）を考えると、いかにセコハンとはいえこれはこれで非常にお買い得商品であることに変りは無い。HP 200LXの生産終了に伴い、DOSベースのパームトップ機が皆無となってしまった現在、CGAマシンで安く遊ぶためのプラットフォームとして、Poqet PC Plusは謎ぱ〜マニアの恰好なターゲットとなるであろう。携帯端末愛好者の方々は、是非このPoqet PC Plusを購入し、DOS/C文化の継承に努めてもらいたいものである。